

三浦市毘沙門B洞窟出土の弥生式土器

神 沢 勇 一

一、序

三浦半島に存在する海蝕洞窟遺跡のうち、弥生時代に属するものは大部分が住居として利用され、厚い灰層と貝塚の堆積とを遺し、土器のほか、銚・廻転銚頭・釣針・貝庖丁・貝輪・卜占に使用された灼骨片など当時の漁撈技術、社会状態の一面を物語る重要な遺物を出土した。その居住者は出土遺物ならびに洞窟内の貝塚の堆積から、漁撈を主体とする移動性の漁獵者と考えられ、その年代的位置は出土々器からいずれも、後期初頭の久ヶ原期に比定されている(註1)。すなわち、弥生時代に於ける海蝕洞窟の利用は久ヶ原期という極めて限定された時期に行われているのであって、洞窟遺跡の研究上かなりに注意されなければならない点である。しかしながら、各洞窟跡出土の土器を検討してみると、それらと久ヶ原式土器との間には形態の組成・器形・文様等に於いて、やや差異がみられるのである。与えられた資料に対して、出来得る限りその年代的位置を明瞭にすることが歴史学の常道であるならば、右の差異が何に起因するものであるかの解明がなされなければならないであろう。筆者はこの意味に於いて洞窟遺跡出土の弥生式土器の再検討を企図し、その第一段階として、ここに比較的資料の良好な毘沙門B洞窟遺跡出土の土器を採りあげたのである。稿を起すにあたって、終始御助言と御便宜を賜った赤星直忠先生に深く感謝する次第である。

二、出土々器の分類

毘沙門B洞窟は神奈川県三浦市南下浦町毘沙門海岸の断層崖の中腹に位置し、奥行約一七米を計る大形の洞窟である。本洞窟からは弥生時代の遺物の他に古墳時代の遺物も出土しているが、これらは間層をへだてて上下に層位的な差をもって存在する。下の弥生時代の遺物包含層は上半が混土貝層、下半が純貝層となっており、遺物の大部分は洞窟奥半部の混土貝層中から出土した。なお、遺物包含層中に於ける土器の層位的な差異の有無は明らかではない。土器は復原の結果ほぼ器形を察知し得る四例を除き、大部分は小破片で、総量はリソゴ箱に半分程度である。形態には壺形と甕形が認められる。土器片の多くは特徴に乏しい胴部破片であるが、多少なり特徴を認め得る少数の資料を基に整理して個体数を検討した

結果、壺形土器に於いては最低四個体、甕形土器に於いては一五個体の存在を識別出来た(註2)。

壺形土器——器形の特徴によって二類に細分される。

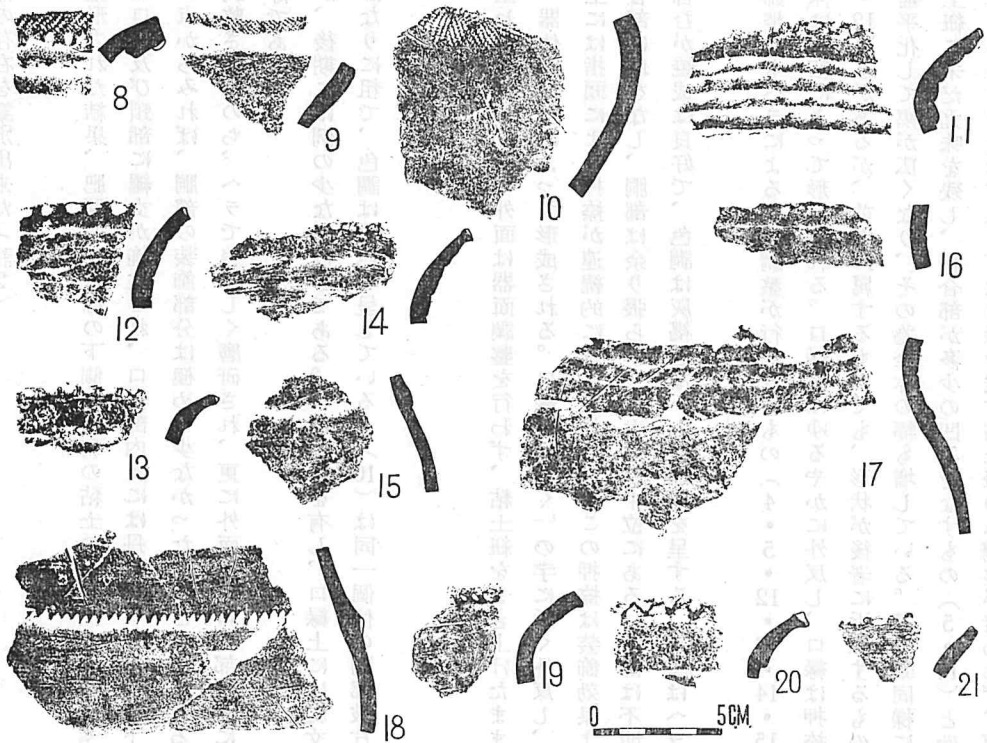
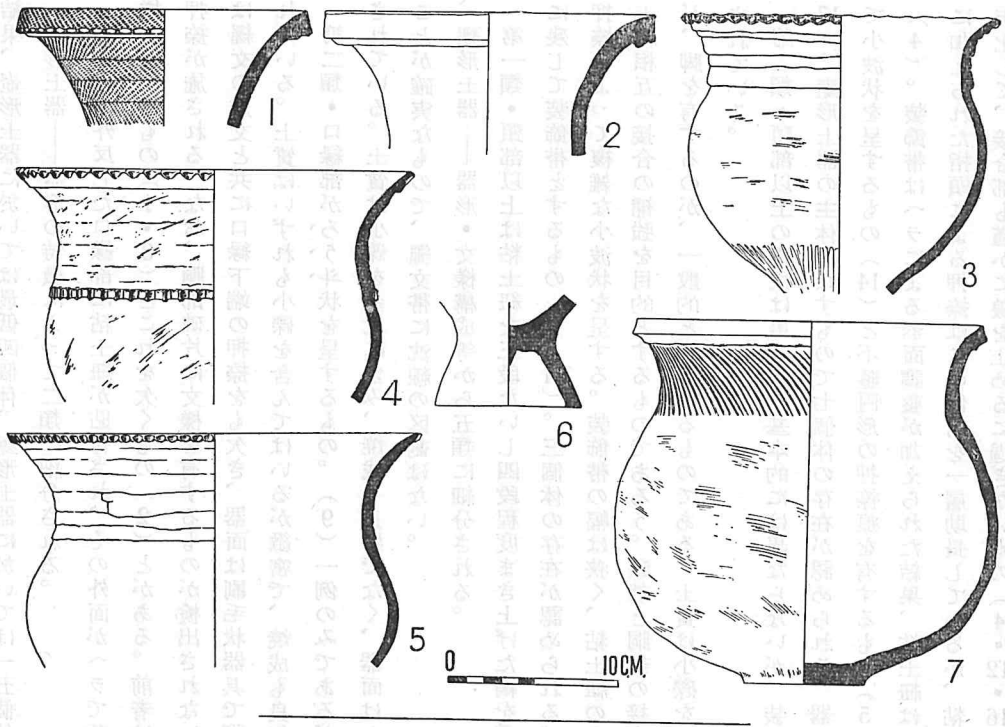
第一類・外反した口縁部に粘土紐が貼付され、その外面がヘラで整形された結果、肥厚した口縁の下側に余剰の粘土のはみ出しを残すもの。文様を有するもの(1・8)とこれを欠くもの(2)とがある。前者は口縁及び頸部に縄文が施文され、口縁部内面には丹彩が、また口縁下端には押捺が施される。なお、胴部破片に文様を有するものが検出されない点からみれば、胴部の裝飾部分は極めて少なかったものと考えられる。後者は縄文の施文と共に口縁下端の押捺をも欠き、器面は刷毛状器具で調整されたのち、ヘラで美しく磨研され、更に外面及び口縁部内面に丹彩されている。土質はいずれも小礫を含んではいるが緻密で、焼成も良好である。

第二類・口縁部がろう、斗状を呈するもの。(9)一例のみであるが、後期には例の少ない器形である。口縁は角を有し、口縁上には縄文が施文されている。土質は小礫を多量に含み、焼成も良好でなく、器面はかかなり粗で、色調は黒色を呈している。(10)は同一個体の胴部破片であることが確かなもので、縄文帯に沈線の区劃はない。

甕形土器——器形・文様構成等から五類に細分される。

第一類・頸部以上は粘土紐を三段ないし四段程度まき上げた輪を重ねて構成し、その外面は器面調整を行わず、粘土紐をまき上げたままの状態に残して裝飾帯とするもの(3・11)。三個体の存在が認められる。器体は輪積によって形成される。口縁部は「く」の字に近く外反し、口縁は押捺によって複雑な小波状を呈する。裝飾帯の幅は狭く、粘土紐の上には指頭による押捺が連続的に加えられるが、この押捺は裝飾効果よりも粘土紐相互の接合の補強を目的とするものであろう。頸部と胴部の接合部は段をなし、胴部は余り張らず、最大幅は中位にある。底部は不明であるが、脚を有するのが、一般的と思われるものである。土質は小礫を含むが焼成は良好で、色調は灰褐色ないし黝黒色を呈する。器面はヘラで調整されている。

第二類・頸部以上の構成は第一類と基本的には異ならないが、裝飾帯にもヘラによる器面調整が行われるもの(4・5・12・13・14・15・16・17)。甕形土器の主体をなすもので七個体の存在が認められる。器体は輪積によって形成される。口縁部はゆるやかに外反し、口縁は押捺によって小波状を呈するもの(14)と不整形の押捺痕を有するもの(5・12)とがあるが、前者に属するものでも、形状が後者に近似するものもある(4)。裝飾帯はヘラによる器面調整が加えられた結果、粘土紐は扁平化して幅が広くなり、その為全体の幅も増している。第一類同様に粘土紐に加えられた指頭による押捺はこの傾向を一層助長しているが、粘土紐に未だ丸味を残し、接合部が多少の凹みをなすもの(5・14)と殆んど平板化して、接合部も僅かに線を止めるに過ぎないもの(4・12・16)とがある。なお、(4)は口縁を成す粘土紐のみ調整が行われず、複合口縁



昆沙門洞窟出土弥生式土器図

状の外観を呈する。頸部と胴部の接合部は僅かに段を残す(15・17)が、この部分に押捺が加えられ、更にヘラで刺突の施されたものが一例ある(4)。最大幅は中位以下にあり、かなり下膨みの器形を示す。底部の形状は不明である。器面は(5・16)の他は概して凸凹が著るしく、ヘラ痕或は擦痕を残している。土質は小礫を多量に含み、焼成は一般に不良である。その為器面は粗で色調は暗灰色或は黝黒色を呈する。

第三類・頸部と胴部の接合部の段にヘラによる刻目が加えられるもの(18)。一例である。器体は輪積によって形成される。器形は第二類と大差ないものと考えられる。頸部には粘土紐の痕跡はみられない。器面は頸部はヘラ、胴部は刷毛状器具によってそれぞれ調整され、土質・焼成とも良好で、色調は外面は黝黒色、内面は明褐色を呈している。

第四類・粘土紐の貼付による肥厚した口縁部を有するもの(7)。一例である。器体は輪積によって形成される。最大幅は胴部下半にあり、器形は著るしく下膨み状を呈する。底部は浅い上げ底である。器面は粗い刷毛状器具で調整され、頸部を除いて更にヘラで磨研されるが、なお多少凸凹を残す。土質は小礫を多量に含み、焼成はやや良好で色調は赤橙色を呈する。

第五類・個体としては識別し得るが、少数かつ小破片のため詳細の不明なものを一括した。(20)・口縁部破片。粘土紐から作り出した幅広の低い段を有し、口縁は押捺によって複雑な小波状を呈する。土質は小礫を多量に含み、このため器面はヘラによる調整にもかかわらず粗である。焼成はやや不良で、色調は暗灰色を呈する。同一個体の破片から判断すれば、かなり下膨みの器形をとるものと考えられる。(19)・口縁部破片。口縁にはヘラによる浅い刻目を、器面にはヘラによる調整の際の擦痕を有する、土質は小礫を多量に含み、焼成はやや不良で色調は黝黒色を呈する。(21)・口縁部破片。口縁には押捺が加えられ、器面には刷毛目様の擦痕が残されている。土質・焼成とも不良で粗である。

三、考 察

右に述べた資料を整理してみると、壺形土器に於いてはやや異形の(9)を除き、粘土紐のはみ出しを残す口縁部の形態・口縁下端の押捺・文様部分が少なく同時に沈線による文様区劃がみられない等の諸点は久ヶ原式土器よりもむしろ、弥生町式土器への近似を示している。甕形土器に於いてはやや種類があるが、複雑な小波状を呈する口縁・粘土紐による口辺部裝飾帯・中位にある胴部最大幅等の久ヶ原式土器の特徴を示すものは第一類の三個体のみである。これに対して甕形土器の主体をなす第二類及び以下の各々は、器面調整による輪積裝飾帯の退化と胴部最大幅を中位以下に有する下膨みの器形を共通の強い特徴とし、そのほか口縁に不整形の押捺痕を有するもの或は頸部と胴部の接合部に押捺を有するものを混える等、弥生町式土器への近似を示している。これら甕形土器に於ける二者が時期を異にして存在したか否かは、層位的には明らかでないが、第二類以下の各々が後出的であることは技術的にも形態的にも疑をさしはさむ余地がないであろう。

